

第 4 問

【解答】

	仕		訳	
	借方科目	金額	貸方科目	金額
(1)	材 料	2,440,000	本 社	2,440,000
(2)	仕 掛 品	4,140,000	賃 金	6,040,000
	製 造 間 接 費	1,900,000		
(3)	製 造 間 接 費	90,000	材 料	90,000
(4)	仕 掛 品	2,484,000	製 造 間 接 費	2,484,000
(5)	製 品	7,525,000	仕 掛 品	7,525,000

【解説】

工場会計を独立した場合の記帳に関する基本問題である。工場会計独立の際の記帳では、本社と工場それぞれに設定されている勘定科目をしっかりと把握したうえで解答することが重要である。

(1) 材料の購入に関する仕訳

材料を購入し、工場（倉庫）に搬入した場合の仕訳は、以下のとおりである。

(借) 材 料 ××× (貸) 買掛金など ×××

材料勘定は工場に設定されているが、支払いに関する処理は本社で行っているため、工場および本社での記帳は以下のようになる。

工場：(借) 材 料 ××× (貸) 本 社 ××× ←工場の仕訳問題である。  
 (本社：(借) 工 場 ××× (貸) 買掛金など ×××)

なお、材料購入原価は、以下のとおりである。買入手数料も購入原価に含める点に注意すること。

$$\frac{3,000 \text{ kg} \times 800 \text{ 円}}{\text{素材費}} + \frac{100 \text{ kg} \times 200 \text{ 円}}{\text{補助材料費}} + \frac{20,000 \text{ 円}}{\text{買入手数料}} = 2,440,000 \text{ 円}$$

新版日商簿記テキスト工業簿記 p.231 参照

## (2) 賃金の消費に関する仕訳

賃金を消費した場合、賃金勘定の貸方から直接労務費は仕掛品勘定、間接労務費は製造間接費勘定のそれぞれ借方に振り替える。賃金、仕掛品および製造間接費の各勘定は工場に設定されていることに注意する。

$$\begin{array}{l} \text{直接労務費： } 2,760 \text{ 時間} \quad \times \quad 1,500 \text{ 円} \quad = \quad 4,140,000 \text{ 円} \\ \quad \quad \quad \text{(直接作業時間)} \quad \quad \quad \text{(予定総平均賃率)} \\ \text{間接労務費： } 100 \text{ 時間} \quad \times \quad 1,500 \text{ 円} \quad = \quad 150,000 \text{ 円} \quad \text{(直接工の間接労務費)} \\ \quad \quad \quad \text{(間接作業時間)} \\ \quad \quad \quad \frac{1,800,000 \text{ 円} - 200,000 \text{ 円} + 150,000 \text{ 円}}{\text{要支払額の計算}} = 1,750,000 \text{ 円} \quad \text{(間接工の間接労務費)} \\ \text{間接労務費合計：} \quad \quad 150,000 \text{ 円} + 1,750,000 \text{ 円} = 1,900,000 \text{ 円} \end{array}$$

新版日商簿記テキスト工業簿記 p.232 参照

## (3) 棚卸減耗費の計上に関する仕訳

材料の棚卸減耗が発生した場合、製造間接費（間接経費）として把握し、材料勘定の貸方から製造間接費勘定の借方に振り替える。

新版日商簿記テキスト工業簿記 p.47 参照

## (4) 製造間接費の配賦に関する仕訳

製造間接費を配賦した場合、配賦額を製造間接費勘定の貸方から仕掛品勘定の借方に振り替える。予定配賦が行われる場合は、予定配賦率と予定配賦額は、以下のように計算する。

$$\text{製造間接費予定配賦率} = \frac{30,240,000 \text{ 円}}{33,600 \text{ 時間}} = 900 \text{ 円/時間}$$

$$\text{製造間接費予定配賦額} = 2,760 \text{ 時間 (直接作業時間)} \times 900 \text{ 円/時間} = 2,484,000 \text{ 円}$$

新版日商簿記テキスト工業簿記 p.80～88 参照

## (5) 製品完成時に関する仕訳

製品が完成した場合、完成品原価を仕掛品勘定の貸方から製品勘定の借方に振り替える。ここでは製品倉庫が工場にあり、製品勘定が工場に設定されている。

$$\text{完成品原価} : \underbrace{5,500,000 \text{ 円}}_{\text{製造直接費}} + \underbrace{2,250 \text{ 時間} \times 900 \text{ 円/時}}_{\text{製造間接費}} = 7,525,000 \text{ 円}$$

新版日商簿記テキスト工業簿記 p. 24～25 参照

## 第 5 問

【解答】

問 1 

4,500	万円
-------	----

問 2 

5,500	万円
-------	----

問 3 

10	%
----	---

問 4 

200	万円
-----	----

問 5 

40	万円
----	----

【解説】

損益分岐点分析の基本的な問題である。

問 1

損益分岐点を求める計算方法には様々なものがあるが、販売単価や単位当たり変動費額が示されていない場合、以下の計算式で損益分岐点の売上高が算定できる。

$$\text{損益分岐点の売上高} = \frac{\text{固定費}}{\text{貢献利益率}}$$

このとき、貢献利益率は以下の式で求められる。

$$\text{貢献利益率} = \frac{\text{貢献利益}}{\text{売上高}} = \frac{2,000\text{万円}}{5,000\text{万円}} = 0.4$$

これにより、損益分岐点の売上高は、以下のように計算できる

$$\text{損益分岐点の売上高} : \frac{1,000\text{万円} + 800\text{万円}}{0.4} = 4,500\text{万円}$$

## 問 2

目標利益を達成するための売上高は、以下の計算式で算定できる。

$$\text{損益分岐点の売上高} = \frac{\text{固定費} + \text{目標利益}}{\text{貢献利益率}} = \frac{1,000\text{万円} + 800\text{万円} + 400\text{万円}}{0.4} = 5,500\text{万円}$$

## 問 3

損益分岐点の売上高が 4,500 万円に対し、現在の売上高は 5,000 万円であり、金額では 500 万円落ち込むと損益分岐点になる。それを比率で示すと以下のようになる。

$$\frac{500\text{万円}}{5,000\text{万円}} = 10\%$$

## 問 4

貢献利益率は 0.4 である。したがって、売上高が 500 万円増加すれば、貢献利益は 200 万円 (=500 万円×0.4) 増加すると計算できる。固定費に変化がないため、営業利益は貢献利益の増加分である 200 万円増加することになる。

## &lt;別解法&gt;

売上高、変動費および貢献利益の三者には比例関係が成り立つ。したがって、売上高が 5,000 万円からさらに 500 万円、つまり 10% (=500 万円÷5,000 万円) 増加すれば、貢献利益も 2,000 万円から 2,200 万円 (=2,000 万円×1.1) に 10%増加し、増加分は 200 万円と計算できる。

## 問 5

貢献利益率が 0.4 であるならば、売上高を 100 万円引き下げるということは、貢献利益は 40 万円減ることになる。損益分岐点売上高では利益も損失も発生していない (すなわちゼロ) ので、固定費も同額の 40 万円引き下げる必要がある。

## &lt;別解法&gt;

損益分岐点の売上高を 100 万円引き下げるということは、損益分岐点の売上高が 4,400 万円 (=4,500 万円-100 万円) になることである。

この金額を問 1 の計算式に当てはめれば解くことができる。

$$4,400\text{万円} = \frac{X(\text{固定費})}{0.4}$$

$$X = 4,400\text{万円} \times 0.4 = 1,760\text{万円} \quad (\text{損益分岐点を } 100\text{万円引き下げるための固定費})$$

もとの固定費は 1,800 万円であるから、40 万円 (=1,800 万円-1,760 万円) 引き下げれば損益分岐点を 100 万円引き下げることになる。

新版日商簿記テキスト工業簿記 p. 222～223 参照